

停電

堀川班 北村 興 一

古いお話を、という事でしたが、約五十年前の、不思議な事実を、記させて頂きます。

その頃、私は今の、キッズプラザ辺りに在った、大阪市交通局病院に、勤めて居りました。ある時、深夜に、開腹手術がありました。天王寺に居た外科医二名は、タクシーで来る。私は天満市場から自転車で急行して麻酔を担当。ところが、タクシーは病院の、指定業者しか使えない、と云った無茶な時代でした。麻酔も、エーテルを顔に、ぶちまけている様なやり方でした。麻酔器はハイドリンク。ドレーガーの完全コピーを、メラが出した物を、昭和三十年に搬入し、その使い初めは、阪大の助教授が来られたのですが、挿管は出来ず、マスクでやられたと聞きました。麻酔器はそのまゝ、二年間のお蔵入り。その後、私が本務採用になり、市大の水野教授外しても、大丈夫でしたから、一台の麻酔器で同時に二人の手術をすることは、再々でした。その頃、天理よろず病院が開院しました。オープンのレストランに行った同僚が「オイ、向うには麻酔器が5台、並んでたぞ」と云ったの

が、今でも頭にあります。

ペントレンは、サクシンが切れて自発呼吸が再開したら、放置しておけば、オーバードージスにならず、貴重な薬でした。

閑話休題。前記の深夜手術の最中、外廻りのプレさんが、二重窓の内側の磨硝子を開けるなり、「あれっ」と叫び声を上げました。しかし、後が続きません。「どうした」と声をかけますと、「まっ暗です」「まっ暗って何だ」「まっ暗です」これは尋常ではないと感じ、「北野は」と問いますと、「まっ暗です」「大阪駅は」「まっ暗です、大阪中、まっ暗です」「何でウチだけ灯いてるんだ」何か不気味になり、早く手術、終わろう、という始末の一夜でした。皆が帰宅する頃には、街も明るくなって居ました。

それから一週間程して、電気の専門家が患者で来院しました。その件を話しました。「何で、ウチだけ電気が灯いていたのか」「当たり前ですわ、A級ですから」「エッ、一体そのA級というのは何の事」「それはね、以前、米軍が大阪を占領した時に、北野病院は、ウチが使う、絶対に停電をさせるな、アメリカ人は死ぬまで、停電を知らんのだ」と命令されたんですわ。もし、停電なんかさせたら、死刑か判らん時ですわ、だから、電源は三系統を入れたんですわ。それで序に、隣のワシ等の病院にも、線を引き込んですわ」

云われて再認識させられたのは、大阪市電気局病院という字が、あちらこちらに、ある病院でした。

事業主病院とは、他に鉄道病院、通信病院があり、その職場の従業員しか診ないという、特殊で家族的な病院でした。

大阪市が赤字再建団体になった時、赤字病院は潰せと、自治省の命令で昭和四十三年に廃止になりました。その赤字は、年間一億でしたが、人件費も年間、一億でした。500トンの捕鯨船、一隻が四億の時代でした。

A級の件ですが、当時の日本は今の北朝鮮と同じで、電気は停電だらけ、三日間位の停電もよくあり、五十ボルト送電が通常の時代もありました。石炭不足もひどく、通学列車も、例外でなく、一日の本数が半分にされ、一番列車で行っても遅刻、最終授業まで教室に居ると汽車が無くなり帰宅不能。次には更に状況悪化、二ヶ月間の休校になってしまいました。米軍専用列車を通すために、単線の山陰本線では、四時間位も列車は来ず、駅の待合室は老人、女性で満員。雪の降る中で、屋根の無い駅前広場で約千人の中学生は立っている。入って来る米軍専用車は、かつての一等車で、一輛に一人か二人の米軍人、それぞれ数名のパンパンを引連れていた。若い米兵が、列車内でもピストルを日本人に向けて、ゲラゲラ笑って遊んで居た。私の中学同級生達は、今でもアメリカへは遊びに行かないと云う。

終戦の冬、但馬にも米軍が数十名やって来て、2ヶ月位、中学

の洋風会館に滞在した。英語の教師は、通訳に駆り出された。米軍から砂糖を貰われて、隣り組の十軒程に、盃に二杯ずつ配られたと、後で聞いた。

A級の電源は、三回路の電源と聞いて感心したのだが、私が昭和三十五年捕鯨母船に乗った時、規則で船内巡視があり、それを赤道付近でしてくれる。暑いなんの、ウォータークーラーはお湯が出る始末。食塩錠を掌に盛り上げて、ポリポリかじっている。通風筒の下で金魚みたいに、口をパクパクして外の空気を吸っている。

世界で一隻の、タービンで発電機を廻し、モーターでスクリューを廻すという船だったが機関室の高い天井の左右にドラム缶大の物があつた。何かと尋ねると、非常用の発電機です。あれを使う時は船が沈む時です。最後まで電気を送るために、両側の天井に付けてあるのです、との返事だった。

東日本大震災の原発事故も、電源が切れた、ディーゼル発電機が、掛からなかった。

電源が一番も二番も三番も切れた、とは全く報道されない。あの後すぐに、米国で電源が切れたが、即、自動的に、ディーゼル発電機が廻り、事なきを得た、という報道があつた。

北区あたりの水道は柴島の浄水場から来るが、現場の職員に、停電したらどうする、と尋ねると、「あゝ、そんなもん、デ

イーゼル廻すからどうもない」「すぐにかかるか」「規則では週に一回、掛ける事になつてゐるが、ウチは一日置きにやつてゐる」

「偉いなあ、それで燃料は何日分」「二日分や」「なんで二日分や、巨大地震で、送電線のタワーは倒れるし、道路がこわれて、修理の重機も来れないしとなるのに、なんで二日分や」「それ以上、置くと消防法にひつかゝるんや」「よく云うわ、昔の沈殿式のプールは無くなって、テニスコートや野球場にしてるやないか、ガソリンスタンドの地下タンクの十や二十位、すぐに地下に置けるやろ」大阪市は、こういう事です。これを聞いてから、患者さんには、水の備蓄を、すゝめて居ります。